

保育環境としての施設・設備に関する一考察

大正期の幼稚園を中心に

① 東京女子高等師範学校附属幼稚園の遊戯室に見られた教育実践

永井 理恵子

はじめに

(1) 本考察の目的

平成二年度より実施された幼稚園教育要領は、総則の1・幼稚園教育の基本の冒頭において、幼稚園教育は環境を通して行うものであることを基本とすると、幼稚園教育における環境の果たす役割の重要性を強調している。また、保育所保育指針においても総則の1において、保育所保育の基本として子どもが健康・安全で情緒の安定した生活ができる環境を用意することが示されて

いる。幼稚園教育・保育所保育の環境とは、教師や保母・子どもなどの人的環境、自然的環境、物的環境など、子どもをとりまく全ての事物を指すが、それらの中から特に幼稚園舎および室内環境の設定に焦点を当て、教育実践との関連に注目して考究を進めながら我が国におけるそれらの歴史的背景の一端を辿ろうとするのが、本考察の目的である。

(2) 本考察の構成

本考察は、全三回の報告にわたっておこなうものであ

る。

第一回および第二回報告前半は、国が我が国で初めて幼稚園舎を建て、明治九年の創立以来今日に至るまで、その物的環境・教育実践ともに広く全国の幼児教育関係者の注目を受け続け、我が国の幼稚園教育の牽引車となってきた東京女子師範学校附属幼稚園を事例としてとりあげる。考察の対象とする時代は表題に示したとおり主に大正期であるが、大正期の教育実践や、施設・設備の活用法の革新を描出するために、第一回報告の前半においては同幼稚園の明治期における施設・設備の状況と教育実践の内容・方法について概述する。第一回報告後半以降は、同幼稚園の園舎内における大正期の教育実践の展開と、施設・設備との関連についての考察に入る。第一回報告の後半では遊戯室における実践を、第二回報告の前半においては保育室における実践を、考察の対象とする。

第二回報告後半以降は、東京から遠く離れた岡山県に私立として創設されて以来幾度かの存続の危機に直面し

ながらも、関係者らの熱意によって今日まで教育実践を続けてきた旭東尋常小学校附属幼稚園を事例としてとりあげる。大正期のこの幼稚園は、明治末期に独創的な園舎を建てて、当時大阪・神戸・京都を本拠として広く先進的な幼児教育実践にとりくんできた京阪神連合保育会と関係をもちながら新しい教育実践の創造に力を注いでいた。第二回報告後半および第三回報告ではこの幼稚園において、東京での新しい幼稚園教育の内容・方法や施設・設備の使用状況がどのように受容され、実践に移されていったのかを考察し、東京女子師範学校附属幼稚園におけるそれらと合わせて考えていく。第二回報告後半ではこの幼稚園の保育室における実践を、第三回報告では遊戯室における実践を、考察の対象とする。

一、明治期の実践の展開

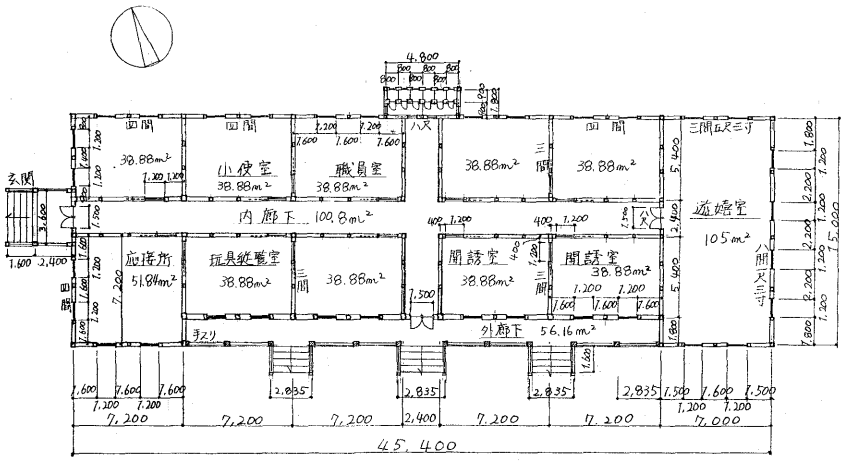
東京女子師範学校附属幼稚園初の園舎は明治九（一八七六）年十一月の開園の日に備えて用意された。この我が国初の幼稚園舎は、南側にベランダ風の外廊下が設け

られた、当時の外国人居留地の建築に多く見られたコロニアル・スタイルと呼ばれる様式によって設計されたものであった。園舎内の室の配置は①が示すように、凹凸のない長方形の園舎の中央に十文字に廊下を設け、その四隅に長方形の室を配置するという、これもコロニアル・スタイルの特徴的な手法によっていた。

明治十年代のこの園舎における教育内容とその活動場所および時間は、以下のようであった。

- (1) 唱歌を歌う 於遊戯室 約20分
- (2) 話をきく 於開誘室 約20、30分
- (3) フレーベル恩物をおこなう 於遊戯室 約90分
- (4) 遊戯か体操をする 於遊戯室・戸外 約30分
- (5) 自由遊びをする 於戸外・随所 課間
- (6) 昼食をとる 於開誘室
- (7) 整理・挨拶をする 於廊下 各室への入退室の都度
- (8) その他（手洗いなど）

これらの教育内容のうち、(2)(3)(6)の活動が主におこなわれていた開誘室（今日の保育室にあたる）における活



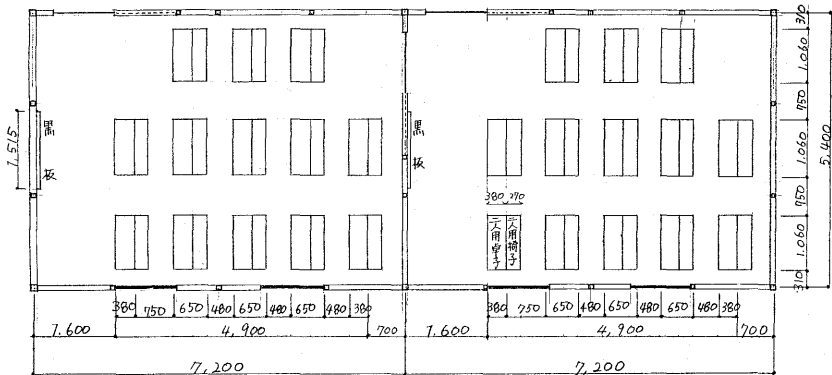
▲ 図① 東京女子師範学校附属幼稚園（明治9年竣工）

平面図

動のようすを見てみよう。幾つかの資料を合わせ読むと、当時これらの活動は、机面に一インチ（約3.3cm）間隔の罫線が縦横に引かれた二人用あるいは一人用の机に向かつて常に座っておこなわれていたと考えられる。そしてその机は長方形の開誘室に、前方に向かつて整然と並べられていたようである。資料に残る当時の幼児在籍数や机椅子の寸法から、当時の室内の状況を想定したものが図②である。

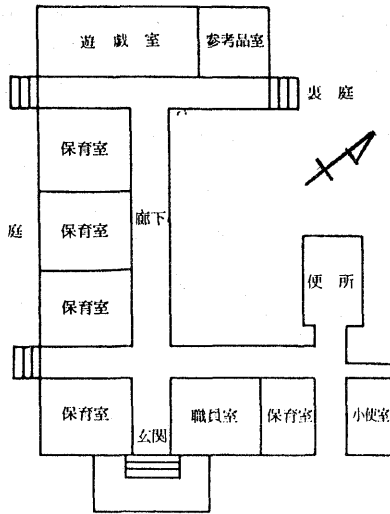
また、遊戯室における活動の中心は「会集」であった。会集は保姆が短い話をきかせた後、唱歌を歌うなどの活動で、全園児が毎朝集合しておこなっていた。遊戯室の北側には常に会集のための椅子が設置されており、南側半面のスペースで時おり遊戯がおこなわれていたものと考えられる。

この園舎は明治一七（一八八四）年に大暴風雨で全壊し、明治一九（一八八六）年に新園舎が建てられている。新しい園舎は大正一二（一九二三）年の関東大震災で倒壊するまでの38年間、使用された。この園舎は、明



▲ 図② 東京女子師範学校附属幼稚園 開誘室内座席配置
想定図（明治11年度 第三ノ組）

治前期に全国各地の中小規模建築に多く用いられた、和洋折衷型といわれる様式によって建てられている。室の配置は明治九年に建てられた園舎とは異なった逆コの字型（図③参照）で、保育室はその多くが南西に面するよ

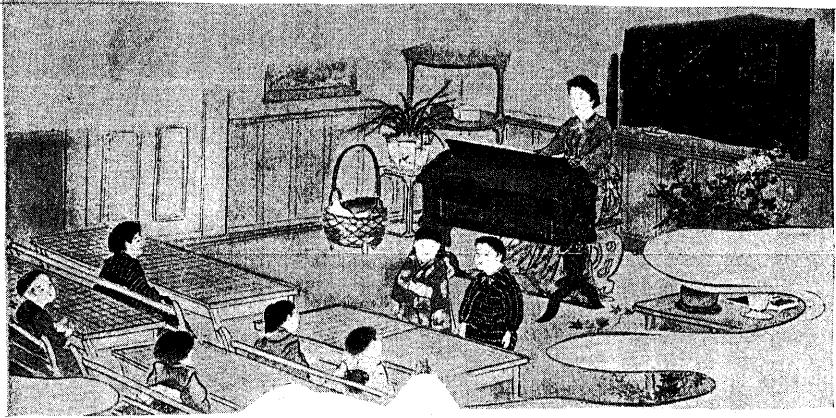


▶ 図③ 東京女子師範学校附属幼稚園（明治19年竣工）
 平面図（文部省発行『幼稚園教育百年史』
 昭和54年 ひかりのくに（株）より）

うに考えられていた（この、南側に保育室を配し、北側に廊下を配するという手法は、明治二八（一八九五）年に文部省が示した「学校建築図説明及設計大要」において小中学校の校舎の基本型として掲示されて以来今日に至るまで、日本の学校校舎や幼稚園舎に広く用いられている）。

この新しい園舎において明治中～後期に実践されていた教育は、その内容・方法のいずれにおいても、旧園舎においておこなわれていたそれらとおおむね違いはなかった。保育室内には以前と同様に前方に向けて机椅子が配置され、幼児はそこに着席して諸活動をおこなっていたことが、図④に示されている。

ところが明治末期になると、教職員たちの間に、従来の教育内容・方法に対する問題意識が芽生えはじめた。フレールベルの二十恩物をおこなう活動が長時間を占めていた保育時間構成や、当時の小学校の教場風の机椅子の配置などに対する疑問が唱えられるようになったのである。これらの疑問は明治四三（一九一〇）年に、幼児教



▲ 図④ 「東京女子師範学校附属幼稚園の実況」 (部分)
武村耕靄画 (参考文献(1)より)

育界に倉橋惣三が登場するに至って一気に表面化され、大正時代に入ってつぎつぎと新しい試みが始められたのであった。

二、大正期の実践の展開 (遊戯室における活動)

明治四三(一九一〇)年に東京女子高等師範学校講師に招かれた倉橋惣三は、続いて大正六(一九一七)年には同校教授兼附属幼稚園主事(今日の園長にあたる)となった。この間に倉橋は数々の講演や雑誌記事において、当時の幼稚園教育内容・方法に対する疑問を提示しつつ、附属幼稚園の実践のありかたを徐々に改革していった。

倉橋の幼稚園教育に関する最初の講演である「幼児保育の新目標」は、明治四五(一九一三)年に、第十九回京阪神三市連合保育会大会に招かれておこなわれたものであった(この概要は『京阪神連合保育会雑誌』第29号(明治四五年七月発行)に、続いて『婦人と子ども』第12巻第10号(同年十月発行)に掲載されている)。当時

29歳の倉橋はこの講演において、当時の幼稚園教育活動の中心場所が室内にあり、その中でも特に机に向かって

手先を使用しておこなう活動が長時間占めていることを、問題点として提起したのである。また倉橋は附属幼

稚園主事就任の約二年前の大正三（一九一四）年から大正四（一九一五）年にかけて、『婦人と子ども』に「保育入門」と題した連載をおこなった。その中で倉橋は

「幼稚園教育の原則」として (1) 自発的であること (2) 相互的であること (3) 具体的であること (4) 習慣的であること、の四項目を挙げていて、特に(2)に基づいて、保育室の使用目的と留意点を次のように述べた。すなわちその使用目的は幼児たちが、相互に関わりながら生活することを訓練することであり、留意点は幼児の座席が幼児の自発性や相互性を妨げず、むしろ充分にそれらを誘導・促進しうるようになっていることであると述べた。

以上のような提案がなされた後の東京女子高等師範学校附属幼稚園の園舎内では、どのように活動がおこなわれるようになったのであろうか。まず最初に遊戯室での

活動の様子を、ひとつの実践記録をもとに考えてみよう。

ここで考察に使用する実践記録は、大正七（一九一八）年三月発行の『婦人と子ども』第18巻第3号に掲載された、東京女子高等師範学校附属幼稚園保母池田とよ子の手による「動物園あそびの記」である。前年度の大正六（一九一七）年末に倉橋惣三の考えによって会集は廃止されていたので、この「動物園あそび」のおこなわれた時にはすでに遊戯室に会集のための椅子は配置されていないなかった。

まずこの活動の内容・方法を分類・整理する。

(1) 実践の発案（大正七年二月一日(金)以前）

幼稚園に保存されたまま使用されていなかった鳥獸標本を使用して動物園あそびをしようという案が、倉橋や保母たちから出された。具体的には、標本を並べるだけでなく他の動物や魚も製作したり、入場券の製作・販売をしたり、場内装飾をしたり、幼い客のための手作りみやげを作ったりして、総合的な活動に発展させたいと考

えられた。

(2) 導入 (二月一日(金)以前)

導入は教育実習生が、象・獅子・虎・熊・駝鳥の各動物と、入口左右の壁の表裏に貼る森の絵を描くことから開始された。実習生たちは紙を何枚もつないで、それを部屋いっぱい広げて描き始め、ほぼ実物大の絵を描こうとした。その絵の進行状況を幼児たちは日々目のあたりにしており、その過程をとおして幼児たちの動物園あそびに対する興味が喚起されていった。絵が描かれた場所が遊戯室か保育室かは不明であるが、紙の大きさから想定して机上ではなく床上で描かれたものと考えられる。

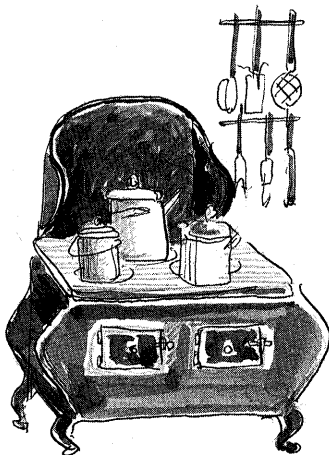
(3) 絵を切りぬく活動 (二月二日(土)保育時間中)

描きあがった象などを、幼児たちは待ちわびて切った。遊戯室の床にむしろを敷き、そのうえに紙を広げ、その周囲に幼児たちが座って切った。切りぬかれた絵は幼児・保姆・実習生たちが協力して、室の正面の壁に掲げた。

(4) おみやげと入場券の製作 (二月二日(土)保育時間中)

(5) 会場設定 (二月二日(土)放課後及び四日(月)朝に保姆たちがおこなった)

標本の鳥獣・水禽を、机上や、大積木を組んで作っ



た禽舎の内外に並べた。水禽の池の周囲は長椅子で囲った。岩・海藻・魚などを描いて切りぬき、窓ガラスの外側に貼って、内側からガラス越しに見えるようにして水族館にした。グランドピアノを覆って小山にみたて、盆栽をあしらい、鳥の標本を置いた。幼児たちの製作した国旗や看板をとりつけた。

(6) 保姆に引率されて幼児たちが見物する (二月四日)

幼児たちは魚を釣ったり、象に餌をやったり、兎の背中を撫でたりした。池の周囲の長椅子に腰掛けて池を覗く者もいた。

(7) 各自で自由に見物したり、写生をする (二月四日)

(8) 遊戯や唱歌をおこなう (二月五日(火)～九日(土))

ピアノの伴奏に合わせて、蛙になって池の中を跳んだり、水族館の側で海の歌を歌ったり、鳥に関わる歌を歌ったりした。

(9) 象に関するお話を聴く (二月五日(火)～九日(土))

(10) おみやげを作り出す ()

この実践において、園舎や諸設備はどのように使用さ

れていたものであろうか。

この実践の活動は、遊戯室においてその活動の大半が展開した。幼児のおこなった活動の大半は具体的な展示物に関わる活動であったため、その物のそばで活動がおこなわれた。遊戯室内の展示物の置かれていない空間で、絵描き・唱歌・遊戯・談話がおこなわれた。

また、この実践における諸設備は、さまざまな用途に組み合わされて使用されていた。まず机椅子は明治時代のように、各保育室において机に向かった作業をおこなうために使用されるだけではなくなった。机は保育室から遊戯室に運びだされて、物を展示するために使用された。椅子は池の周囲をはじめあちこちに置かれて幼児が自由に写生に使用したりした。その他の設備も、明治期とは全く異なる使用がなされた。明治時代には、談話の時間に保姆が一体ずつ室の前方で幼児に示して見せていた剝製や標本が、何体も同時に、そして幼児の手の届く所に、その動物の生活環境と共に合わせて展示された。積木や紙も、明治時代には製作の用具としてのみ使用さ

れていたが、そのような伝統的な使用法を離れて禽舎や池として使用された。ピアノの上にも毛布や盆栽が置かれ、それは楽器としてのみならず台としても使用された。さらに窓ガラスも水族館の水槽のガラスにみたてられた。これらの使用法は、幼稚園によつては今日ごく日常的に見られる方法である。このように、諸設備にその本来的な機能とは全く別の機能をもたせたり、異なる機能をもつ設備どうしを混用するという発想は、保母たちが創意工夫した結果であつた。実践をより効果的におこなうために柔軟な発想をし、ここに園舎や諸設備を積極的に実践に使用する時代の到来が、この記録から読みとれるのである。

次回の報告では、大正期の東京女子高等師範学校附属幼稚園の保育室の施設・設備の使用状況を、教育活動の展開とあわせて見ていきたい。

参考文献

使用した文献は多数に登るが、その一部を次に掲載する。

(1) 倉橋惣三・新庄よしこ著『日本幼稚園史』東洋図書 昭和五年五月

(2) 日本幼稚園協会発行 雑誌『婦人と子ども』『幼児の教育』

明治・大正期発行のもの

(3) 東京女子師範学校附属幼稚園 『東京女子師範学校附属幼稚園規則』 明治十一年三月

(4) 東京女子師範学校発行 『幼稚園記』附録 明治九年七月

(5) 東京女子師範学校 『女子師範学校附属幼稚園保育要項』

明治三十九年四月

(6) 東京女子高等師範学校編集 日本教育史文献集成『東京女子高等師範学校六十年史』 昭和五六年二月

*本報告は、平成三年度修士論文の一部を加筆・修正したものである。

— つづく —

東京大学大学院 博士課程在学
ゆかり文化幼稚園 非常勤講師